

農林水産大臣賞受賞

めん羊を核とした里づくり

～美しい自然と地域の和を次世代へ

なかざわ よう さと くみあい

受賞者 **中沢めん羊の里づくり組合**

ふくしまけんひがししらかわぐんさめがわむら
(福島県東白川郡鮫川村)

■ 地域の沿革と概要

中沢めん羊の里づくり組合がある鮫川村は、福島県の阿武隈山系の最南端に位置し、標高は400～700m、総面積は131k㎡であり、その約76%を山林が占める典型的な中山間地域である。人口は約4,200人であり、この10年間で人口の減少とともに高齢化率が約30%に達するなど、少子・高齢社会の波が一足先にやってきた村でもある。

村の基幹産業は農業であり、農家世帯比率は64.7%と福島県内で最も高く、肉用牛繁殖や養豚等の畜産を中心に、稲作やトマト、インゲン、シイタケ等の栽培を組み合わせた複合経営が主体となっている。

村は、農業振興と特産品の開発及び村民の健康づくりを有機的に連動させ、一体的に推進することを目指し、新たに「まめで達者な村づくり事業」を創設し、村民総参加型のむらづくりを進めている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

中沢めん羊の里づくり組合のある中沢集落は鮫川村の中央部に位置する山間集落で、かつてはコンニャクの生産と養蚕が盛んであり、活気に溢れ

第1図 位置図



※ 白地図 kenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	集落	
組織の性格	地縁的な集団	
農家率 (内訳)	88.9%	
	総世帯数	18戸
	農家数	16戸
販売農家数 (内訳)	16戸	
	専業農家	1戸
	1種兼農家	1戸
	2種兼農家	14戸
主要作目 (農業産出額)	養豚	115.0百万円
	水稻	5.3百万円
	肉用牛繁殖	1.5百万円
農用地の状況 (内訳)	耕地計	16.0ha
	田	13.0ha
	畑	3ha
	樹園地	0ha
	耕地率	5.7%
	農家一戸当たり農用地面積	1.0ha

ていた。

標高 450～600m に住居が散在しており、世帯数は 18、うち農家は 16 戸、専業農家は養豚経営の 1 戸のみで、兼業農家割合は 94% となっている。

集落の農用地面積は約 16ha であり、農用地の主な利用状況は、水稻 6.3ha、牧草 1.4ha、水田放牧 0.8ha、露地野菜 0.3ha 等となっている。ここ数年で、オヤマボクチやウメ、カボチャ等の栽培面積が増加し、農用地利用率の低下は年々緩やかになっているが、遊休農地のさらなる有効活用が課題となっている。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

ア 集落に元気を取り戻したい！

今から 10 年程前の中沢集落は、コンニャク芋の生産や養蚕の衰退に伴い兼業化や高齢化が進み、このことにより耕作放棄地が目立ち始め、寄り合いの機会が少なくなるなど、集落の活力が徐々に失われていく状況であった。

このような中、集落では平成 12 年に「中山間地域等直接支払交付金制度」を導入し、耕作放棄地の発生防止、農地や農道の維持・管理などに取り組むこととした。

そんな折、集落の長老から「昔盛んだっためん羊で集落の活気を取り戻してはどうか。」との提案があり、①めん羊は過去に多くの家で飼育していた経験があること、②遊休農地を有効に活用できること、③牛などに比べ高齢者でも扱いやすいこと、④子どもたちの情操教育にもつながることなどの理由から、「じゃあ、やってみっぺ」と賛同者を得て、平成 16 年 11 月に中沢めん羊の里づくり組合の前身である「中沢集落めん羊の里づくり会議」を発足させた。

イ めん羊による地域おこしは一進一退…

集落では、この取り組みが将来にわたって続けることができるよう、めん羊の飼養方法や採算性をテーマに話し合いを続けた。

このような中、平成 17 年 10 月、採算の合うめん羊経営のあり方を探ろうと、岩手県の農場を視察したが、「肥育経営では採算が取れない。」との指摘があり、集落内からは「趣味や理想だけではやって行けない。採算が取れなければ、めん羊には取り組めない。」との意見も出て、一旦は挫折した。

平成 18 年 1 月、視察の結果を踏まえて今後の方向性を話し合うため、村長も交えて集落検討会が行われた。村長からは「集落の活性化が村全体の発展につながる。財政的な支援はできないが、村職員による全面的サポートを約束する。」という話があり、これを受け「めん羊で地域の和を作り、まず中沢集落が元気になろう」と、集落全員が再び前向きに考え始めた。

ウ 「めん羊の里づくり」がついに始動！

平成 18 年 7 月、中沢集落と同じような中山間地域にある小規模農場の状況を調査するため、福島県二本松市にある農場への視察を行った。

この視察により、耕作放棄地などに放牧する繁殖経営なら採算が取れるとの確信を得ることができ、同年8月、全国唯一のめん羊・山羊市場である福島県家畜市場から、サフォーク種の雌めん羊2頭を導入した。

めん羊の飼育小屋は、集落内にある利用されていない牛舎を改造し、放牧地の柵は地元の竹などの資材を使うなど、極力お金を掛けず、全て住民たちの手作りにより飼育の準備を行った。



写真1 初導入のめん羊

エ 「めん羊の里中沢」の5つの目標

平成18年11月には、集落のお年寄りから子どもまでが中沢公民館に集まり、「めん羊の里中沢」発足の記念式典を開催した。式典では、参加者全員で牧草の種まきを行い、牧草地の脇にある飼育小屋の前には、地元材を使った大きな手作りの看板を掲げた。

この看板には、集落のむらづくりの5つの目標①遊休農地の活用、②集落の活性化、③和みの空間の創出、④子ども達の情操教育、⑤将来、集落でジンギスカンをする、が刻まれており、むらづくり活動の羅針盤となっている。



写真2 目標を刻んだ看板

オ もっと地域の宝を見直そう！

めん羊の放牧を始めてから、集落に活気が出てくるようになり、遊休農地や集落内の資源を活用した、新たな取組みを行いたいという気運が高まった。

取り組むに当たっては、外から新しいものを持ち込むのではなく、集落で大切にされていたもの、生活に密着したものに光を当てることとし、現在、ウメやカボチャ、オヤマボクチ（通称ゴンボツ葉）などの栽培が始まっている。

(2) むらづくりの推進体制

ア 中沢めん羊の里づくり組合の組織体制

むらづくり活動の主体は平成16年に発足した「中沢集落めん羊の里づくり会議」であったが、現在は平成19年に農用地利用改善団体として認定を受けた「中沢めん羊の里づくり組合（以下「組合」という。）」に引き継がれている。

組合は、集落内16戸の農家で組織され、めん羊の里づくりの提案者である長老を顧問として、集落の和を大切にしたい運営がなされている。

イ むらづくりの連携組織とその役割

① 農事組合及び中山間地域等直接支払集落協定組織との連携

組合の構成員は、転作関係の調整等を担う農事組合及び中山間地域等直接支払の集落協定の構成員ともなっている。集落協定には、組合の構成員以外の入作の農家の理解も得て、マスタープランに農用地の畜産的利用(めん羊の放牧)が位置づけられており、活力ある住みよい集落づくりを目指して、めん羊の里づくりによる農地の活用や景観づくりが進められている。

② 東西しらかわ農業協同組合との連携

繁殖用めん羊の導入や子めん羊の出荷は、東西しらかわ農業協同組合の助言を受けながら、年1回福島県で開催される全国唯一のめん羊・山羊市場において行っている。

③ 鮫川村商工会等との連携

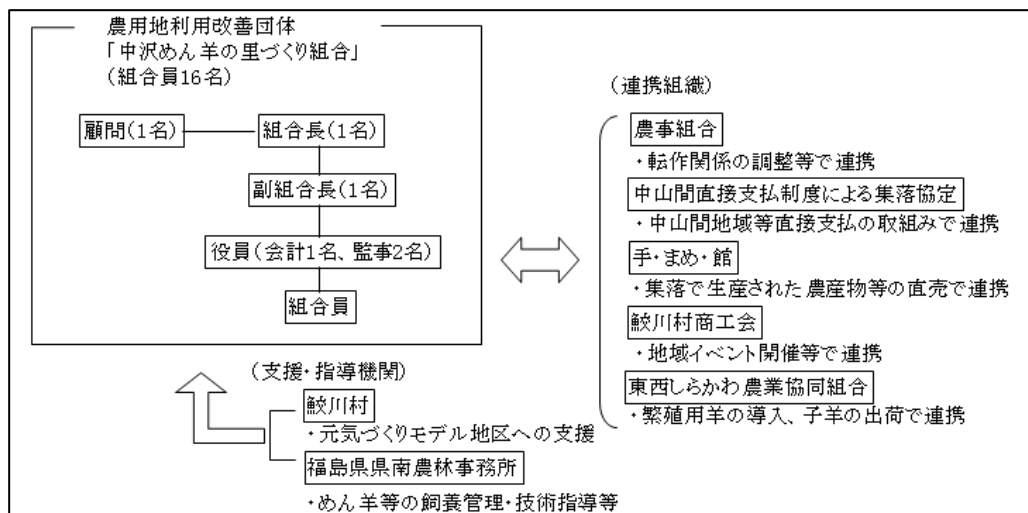
村の一大イベントとして毎年10月に開催される「高原の鮫川うまいもの祭り」では、組合も鮫川村商工会などの関係団体と一体となって青空市などに組み入り、平成21年には初めて「中沢集落産ラム肉」を販売し、大きな反響を得るなど、イベントを一層賑わいのあるものにしていく。

ウ 支援・指導機関とその役割

中沢集落は鮫川村の第3次振興計画の「元気づくりモデル地区」に位置づけられており、村から専任の相談スタッフが配置されるなど、計画策定やむらづくり活動に関して助言等を受けている。

また、農用地利用改善団体の設立や運営、めん羊の飼養管理やウメの栽培管理、導入作物の検討など農業生産技術に関しては、福島県県南農林事務所に相談し、助言を受けている。

第2図 むらづくり推進体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

「昔飼っていためん羊を復活させ、めん羊による地域おこしをして、なんとしても集落を元気にしたい」との思いから、平成17年度より「中沢めん羊の里づくり」をスタートさせて以降、先進地視察研修、集落座談会、めん羊飼養管理研修会を繰り返してきた。平成18年8月には待望のめん羊2頭を導入し、現在は21頭まで増え、集落全体がにぎやかになった。

めん羊放牧等により集落内の耕作放棄地70aが解消され、めん羊のエサとなる草を刈り集めることで、里山の豊かな自然・景観が守られている。

さらに、エサとなる草はできる限り地域内で自給することとし、各家庭で作ってもらった乾草^{かんそう}を組合が全量買い上げてめん羊に与え、ふん尿は堆肥に変えて農地に還元するなど、地域循環型農業が確立されている。

また、昔から地域で栽培されていたウメやカボチャなどの作物を活かし、作付拡大や加工品開発を行うなど、村内においても営農のモデルとなっている。

集落という地縁的なつながりの中で、住民の知恵と工夫によって農業の振興を実現していることは、他の集落の励みともなっており、徐々に周囲の集落へと広がりを見せている。



写真3 遊休農地に放牧されるめん羊

2. 農業生産面における特徴

ア めん羊の里づくりに向けた取組と成果

① 飼養頭数の拡大に向けた取組

年1回の市場からのめん羊導入や、適期交配による子めん羊生産の取組により、飼養頭数は取組当初の2頭から現在ではメス18頭、オス3頭まで着実に増加しており、平成21年からは子めん羊の出荷（7頭）も始まっている。

② 遊休農地解消に向けた取組

めん羊の放牧等による耕作放棄地の解消面積は平成20年度までに70aとなり、農地を確実に保全している。また、集落内の結いにより、毛刈り、爪切り、去勢、繁殖管理、衛生管理等にあたっており、条件不利地域における集落営農の一つのモデルとなっている。

③ めん羊の飼養管理技術向上に向けた取組

福島県県南農林事務所や県南家畜保健衛生所から講師を招き、定期的に飼養管理講習会を開催し、めん羊飼養に関する知識を集落みんなで深めている。こ

の結果、3名の組合員が「めん羊及び山羊の出生確認資格」を取得するなど、飼養管理技術の向上が図られている。

④ 地域循環型農業への取組

平成22年の春からは、地域循環型農業の実践とエサの自給を目指し、集落内の住民に土手草を活用した乾草を生産してもらい、組合が40円/kgで買い上げる取組みを新たに開始した。

めん羊のエサは、この乾草を主体として、地元産のカボチャやバレイショなどの規格外品や大豆の茎葉部分などを活用している。

また、めん羊のふん尿は、堆肥の原料として利用され、地域内の農地に還元されている。

⑤ ラム肉生産と地域イベントを通じた地域活性化の取組

平成21年10月に、村内外や県外から約4,000人が集まり、村が商工会や農協と連携して催す一大イベント「高原の鮫川うまいもの祭り」の青空市において、初めて「中沢産生ラム肉」を地元野菜・特製タレとセットで販売した。

セットにした焼き肉のタレは、地元で無農薬栽培したゴマやにんにくをふんだんに使用し、集落のお母さん方が丹精込めて作った自家製で、「ラム肉との相性は抜群」と大評判となり、限定150パックはわずか数時間で完売した。

組合員の熱意と努力によって生産された希少性の高い「国産生ラム肉」は、中山間地域での新たな取り組みとして、マスコミを通じて広く発信され、県内の飲食店などから「生ラム肉を販売してほしい」との要望が相次いで寄せられた。

現段階では、めん羊の絶対数が少ない上、繁殖期との関係から季節限定の生産となるため、直ちにこうした要望には対応出来ないが、組合員の手と愛情をかけて「手まめ」に育て生産したラム肉は予想を超える高い評価を得、ラム肉生産に対する大きな自信を得ることができた。

今後は品質の安定化を図りブランド化を進めるとともに、販売期間を拡大するため種付け時期の調整を行うなど、経営の一部門として意欲的に取り組み、村直売所へも出荷したいと考えている。



写真4 うまいもの祭りでのラム肉販売

⑥ 6次産業化に向けた取組

平成22年5月には「鮫川ふるさと春まつり」において、地元の子どもたちとめん羊とのふれあい体験を実施し、毛刈りした羊毛でクッション作りを行っ

た。

このように、むらづくり活動の目標の一つでもある、めん羊とのふれあいによる「和みの空間の創出」や「子ども達の情操教育・食農教育」への寄与、毛刈り体験・羊毛加工体験などのグリーン・ツーリズムの実施等、めん羊を核とした農業の6次産業化、地域の活性化に向けた取組も始まっている。

イ 地域資源を活用した加工品開発などの取組

① ウメの栽培と加工品開発

ウメは、梅漬けや梅干しに加工するため、以前から集落内に多く植えられていたが、年数の経過に伴い管理が不十分となり、収穫量が激減していた。このことから、収穫量を確保するため平成18年より年1回、整枝・せん定講習会を開催し、樹形を形成・維持するとともに、作業の効率化のため、病虫害の共同防除を行っている。

また、平成19～21年には合計179本のウメの苗木が集落内に新規植栽され、栽培面積も増加してきている。集落の住民がこれまでの経験を活かして植栽の指導を行うことにより、今では大字単位で新規植栽が行われている。

梅漬けや梅干し等、昔から集落に伝わるウメの加工方法は、集落の女性たちにより技術の継承が行われている。さらに、先進地研修の実施等により、新たな加工品開発の検討も女性たちを中心に開始されている。

② オヤマボクチ栽培と凍みモチづくり

中沢集落で作られる凍みモチには、オヤマボクチの葉がつなぎとして練り込まれている。従来、このオヤマボクチは山に自生しているものを活用していたが、近年、山採りできるオヤマボクチの量が減少していることから、平成19年より集落内での栽培が開始された。

しかし、オヤマボクチは栽培方法が確立されていないため、情報収集と試行錯誤を繰り返しながらの試験栽培となっている。平成22年には先進地（宮城県仙台市）への視察研修も行い、熱心に栽培に取り組んでいる。

現在は3名で栽培しているが、試験ほ場における収穫量はまずまずで、平成22年には栽培面積を開始当初の10aから30aまで拡大している。

平成21年からは、栽培したオヤマボクチを使った凍みモチの加工も始まった。加工品もまだ試作の段階だが、今後は葉としての出荷のほか、凍みモチや柏餅などの加工品として商品化することも検討している。



写真5 オヤマボクチ

③ 鮫川カボチャ（土手カボチャ）づくり

鮫川村のカボチャは土手カボチャと言われ、寒暖の差の激しい気候条件の中、実がぎっしり詰まった甘みのある味わい深いカボチャが採れることで知られている。

農用地の有効活用を図るため、このカボチャの生産を拡大する取組みが開始されており、年々栽培面積は拡大している。生産されたカボチャは村の農産物加工・直売所「手・まめ・館」へ出荷されるほか、小さいものはめん羊のエサとして活用されている。

3. 生活・環境整備面における特徴

ア 環境整備活動と景観保全の取組

集落内の環境整備への取組みとして、水路（6 km）の清掃・草刈り作業を年2回、農道（6 km）の草刈り・補修作業を年2回、農地法面の定期的な点検等を非農家も含め集落共同で行っている。

また、農村景観を保全する活動として、周辺林地（7 ha）の下草刈り作業を年1回共同で行うことにより、水田とその周囲に広がる農村の原風景が今も保たれている。

このほか、ウメ栽培の広がりとともに、将来、集落内外の人々が目で見たい観光梅園を作りたいと、観賞用ウメ（花梅）の新規植栽も始まった。

イ 都市部の学生との交流を通じた地域再発見

平成20年の夏から鮫川村の広報戦略を研究している駒澤大学の学生たちが、平成21年6月、ゼミの一環として、集落の暮らしと地域づくりに焦点を当てた「集落CM」を制作するために、中沢集落を訪れ民泊を行った。

学生たちは、めん羊の飼養状況や、祭礼の様子など集落の人々の暮らしぶりを調査したり、集落の人々との交流の中で、むらづくりの取組状況や課題などについて意見交換を行った。

学生たちからは、めん羊飼養やウメ栽培など「昔からあったもの」を活用した地域活性化の取組に深い関心が寄せられ、集落の眠っていた地域資源に光を当て、活用することのすばらしさを外からの視点によって再認識することができた。

都市部の学生たちの視点で、集落の風景や人々の暮らし、表情を撮影したこのCMは、インターネットの動画サイトを通じ、世界中に発信されている。

ウ 伝統行事や里山料理の継承を通じた世代間交流

祭礼や各種行事では、集落の女性たちが手作りした伝統的な里山料理を持ち寄り、お年寄りから小さな子どもまでが公民館に集まって味わっている。

こうした年中行事でふるまわれる里山料理を通じ、人と自然に負担をかけない農業の大切さや、命を支えてくれるさまざまな地元の食材に感謝する豊かな気持ちを次世代へ伝えている。